

宿の池にも蛙がある。夕方から夜にかけてゴト／＼啼きたてる。啼かぬ時もあるが、啼き出すと随分やかましい。余程大きな蛙とみえて啼き声が恐ろしく強い。宿に来た夜は裏山で啼く蛙かとさえ思った。月の夜更などはい、が、蒸暑い夕方などは、年増の女が鬼灯を鳴らすやうに憎々しく思ふことさへある。客の座敷へ膳を運ぶ婢達は、何かと池の蛙に捨台詞して通る。

盛んに啼き立てる蛙の聲がはたと止む。ガチャンと何か池の中へ投込む音がする。欄へ出ると、何時も愛想のい、番頭がシヤツ一枚の姿で、蛙を逐つてゐる。瀬戸物の破片を片手に一ぱい握つて、一つ／＼規ひを定めて池の中に投付けてゐる。

「当るとキューツと死にをるけれ」
と、番頭は一心に池を廻つて投付けるが、なか／＼蛙には当らぬらしい。

片手の瀬戸物の破片を尽く投込んだ番頭が、愛想い、顔に返つて裏に水を打ち出す頃、再び池は蛙の諸声に満ちてしまふ。

○

夕食の膳を下げる時、宿の婢が今夜は月がい、から石手寺へみんな出掛けるから行かぬかとす、めた。石手寺とは四国五十番かの霊場で、道後にはこの寺の爲めに幾軒かの巡礼宿がある。一番の客も行くと聞いて、一緒に行つて見る事にした。

温泉から戻つて来ると、一番の客はもう酒を始めてしまったから一足遅れるといふので、宿の時計が九時を打つのを聞いて出掛ける。五分ばかり歩くと、湯の町は尽きて月の野路となつた。山ぞひの小さな寺を抜けると、行手は山の麓を流れる川に

沿ふ一本道になった。一匹の螢に行逢ふ。ところ／＼にある人家は、参詣の人に売る線香や焼餅などを暗い電燈の店先へ並べてゐた。

小さい頃から、物見遊山よりも神詣でや寺参りが好きだといふ婢は、ぼつ／＼四国巡礼の色々な事を話す。二三年前に大病をしてからめつきり身体が弱くなつて日毎二三度も温泉につからなければとても身体は持つまい、今まで身体が保てたのも一つは神仏の加護と思ふなど、言ふ。そして行会ふ人に石手寺へ行く道を訊いた。道案内のつもりで来た婢が道を訊くとは、近い処とはい、ながら心もとない。折々夜の暇を見てお寺へ詣つてゐるのだとばかり思つてゐたら、十三の年に一度詣つたきりで、今夜で十三年目だといふ。それでも一本道だったので程なく寺の前まで来た。一かたまり物売の店が並んでゐる処に古い曲りくねつた松があつて、下の石橋を渡ると山門まで長い廊下がある。廊下を進むにつれて、広場を前に寺の練塀が白々と光る。廊下の両側には絶え間なく額が上がつてゐるのが夜目にも見えた。

山門をくゞると広い境内の隅々まで、山を背にした幾つものお堂が並んでゐて、庭の真中に三重の塔が月の光を九輪からまともに浴びて聳えてゐた。月の暗がりにはやはり夜詣での人々があるらしく、話声が洩れてゐて、線香場には線香の束が赤く燃えてゐた。

月を後に本堂の前に立つて賽銭をあげる。賽銭が狐格子の中の暗闇で一つ／＼い、音をたてる。闇の匂ひがふんと鼻につく。